

10. 日本語母語話者の摩擦音知覚における音響的手がかり——機能性構音障害児の語音知覚能力の検討——

上智大学言語障害研究センター¹⁾, 上智大学理工学部
電気・電子工学科²⁾

平井沢子¹⁾, 安 啓一²⁾, 荒井隆行²⁾, 飯高京子¹⁾

【はじめに】機能性構音障害児の中には、構音障害が長期に持続し言語学習や読み書きの問題を重複する例があり、基底に音韻情報処理の問題が推測されている。一方、語音知覚の音響の手がかりへの重み付けは、発達とともに変化することが報告され、話しことばの情報処理の発達の指標の一つと考えられている (Nittrouer et al., 1993)。そこで音韻情報処理に問題を持つことが推定される構音障害児に対する治療への示唆を得るため、音響手がかりへの重み付けの発達的变化を検討した。本学会においては健常成人と構音障害児を対象とした実験結果を報告した。

【協力者】日本語母語話者の健常成人 41 名 (20-36 歳) と構音障害児 2 例 (9 歳 11 ヶ月と 10 歳 4 ヶ月) で、いずれも聴力に問題はない。構音障害児は、構音器官の器質的問題や知的発達に大きな問題はなく、構音障害が長期間持続していた。

【方法】すべての協力者に聴取実験を、構音障害児に構音検査と言語発達検査を実施した。聴取実験は、自然音声/sa/と/ʃa/の子音部分に対する重み付き加算による連続体と、遷移部分のフォルマント周波数を変化させた合成母音/a/の連続体を組合せた刺激音を聴取させ、/sa/か/ʃa/かに同定させた。

【結果】構音検査では/ki//gi/などに一貫した置換と浮動的な歪み、言語検査では、語彙、読み、喚語など言語学習の問題が認められた。聴取実験の結果、成人はいずれかの手がかりに重み付けしており、先行研究の結果と異なった。構音障害児はフォルマント遷移に重み付けしており、先行研究の 3, 4 歳児と同じ傾向を示した。

【結論】成人の反応は一様でなく重み付けの変化は語音知覚能力の発達以外の要因による可能性も考えられた。構音障害児は先行研究における低年齢の健常児と類似した傾向を示し、語音知覚能力の発達の遅れが示唆された。したがって構音障害と言語学習の問題の基底に、共通して語音知覚の問題の存在が推測された。